

第1回資源管理方針に関する検討会
(カタクチイワシ・ウルメイワシ太平洋系群)

1. 日 程 令和4年3月28日(月)10:00~16:20

2. 場 所 AP市ヶ谷会議室A

3. 出席者

水産庁:藤田資源管理部長、魚谷資源管理推進室長、晝間管理調整課補佐、
藤原管理調整課補佐、上田漁場資源課補佐ほか

水産機構:福若浮魚資源部長、船本浮魚資源部副部長ほか

このほか漁業者、漁業者団体、研究者、行政官、報道関係等

計 21 名(会場)+124 名(ウェブ)

4. 概要

(1)水産庁より、資料4を用いて、新たな資源管理について説明。

【主な議論】

- 底びき網漁業においては、複数魚種一括でのTAC設定による管理が検討可能としている理由について教えて欲しい。カタクチイワシはこれに該当しないという説明があったが、その理由はなぜか。
- 資源評価で一番大事な、どういう風に数量を正確に把握するするのかという体制を整備してから管理を考えるべきものではないか。スマート水産業を進めるという話もあるが、具体的なスケジュールが見通せてから進めるべきではないか。
- MSYについて、様々な要素が組み入れられて管理に用いられるようになったという説明があったが、レジームシフト等魚種間の関係など、こういった要素が考慮されるようになったのか。
- 「現行水準」とされた都道府県では目安の数量が示される一方、これには国の留保からの追加配分はしないという説明があったが、これはなぜか。目安の数量が示されると、数量明示による配分と変わらないのではないか。少量配分される都道府県に大量来遊があった場合にどのように対応するのか。すべての都道府県が数量明示で管理するべきではないのか。
- 資源評価には水産機構だけでなく、関係都道府県の水産試験場も共同参画機関として参加されている。資源評価の議論の中で、こういった議論がなされたかというところがよくわからない。議事概要もあるが、一般の人にはわからない。こういった意見があって、どう資源評価に反映されたのか、わかりやすく示してほしい。

(2)水産機構より、資料5を用いて、新たな資源評価について説明。

【主な議論】

- 神戸チャートについて、MSY水準を目指すべきというからには、十字の交点が緑であるべきではないか。長寿命の魚種であれば理解できるが、短寿命の魚種で当てはまるとは限らないので、検討いただきたい。
- 実際の漁獲シナリオは、MSY達成水準の漁獲圧力に β をかける、つまりMSY達成

水準よりも低いレベルでの漁獲となっており、これに漁獲枠の消化率を考えると、結果的にMSYを目指すとならないのではないかと。

- 漁業者も十分理解した上で、議論していくことが大事だと思う。
- 不確実性の多い状況において、漁業の面からは、来遊の変動等を考えると資源量をMSYのちょっと左に来るぐらいにして管理した方がいいのではないかと。
- 資源評価で不確実性があることにより、獲り過ぎるリスクと獲らな過ぎるリスクの両面きちっと評価してどのような管理を考えるべき。
- ウルメイワシの資源評価に関連し、2系資源の資源量推定や将来予測ができないものについて、MSYを目指すということが理解できない。絶対値は分からないが、総合的な評価だということか。
- 獲らな過ぎるリスクに関連し、過去にイカナゴについて、多めに資源を残した方がいいという考えの下、管理を行った結果、共食いにより加入が著しく低くなり、大不漁を起こした経験がある。短寿命の魚種に適用するのはどうかと思う。
- さば類の時の説明よりも分かりやすくなった。自然死亡について、カタクチイワシは大きな影響があると思うが、具体的にどう考えて資源評価を行っているのか。
- 他の生物の影響が大きい中で、TAC管理を検討するのは時期尚早であり、漁業者の理解が得られないのではないかと。すでにMSYベースの管理を実施しているさば類についても、思ったように漁獲が伸びず、不信感が増している。
- 漁業に詳しくない消費者など一般の方にはMSYという考え方は受け入れやすいものとするが、漁業の世界ではなかなか難しい。特に様々な漁業への配分については価値判断も入ってくるので、難しいと思う。単純に実績に基づく配分になるのか。国民に説明するに当たっては、そういった点も丁寧に説明すべき。
- コホート解析に関連し、他魚種との兼ね合いや流通等の影響により、漁獲対象としたり、しなかったりする場合がある。こういう情報が資源評価にどのように反映されるのか。できるだけ正確な資源評価となるよう努めていただきたい。

<カタクチイワシ太平洋系群>

(3) 水産庁より、資料6を用いて、資源管理手法検討部会で整理された意見や論点と対応の方向について説明。

【主な議論】

- 資源管理の具体的な内容は次回に向けて検討ということだが、大中型まき網漁業においては、マイワシやサバ類が獲れない時期にはカタクチイワシを獲っていたが、現状では、主にマイワシやサバ類を狙って獲っており、カタクチイワシは経済的価値も比較的安く、混獲で漁獲されるもの。カタクチイワシについて厳しい管理が行われると、通常の操業に影響を与えかねないことを懸念。既存のTAC魚種は主対象魚種である割合が多く、そんな中、留保枠の設定や漁獲量の激変緩和措置などがとられている。他方、カタクチイワシは混獲であり、資源管理措置の検討に当たっては、従来の柔軟な措置だけでなく、様々な運用面での工夫なども含め、議論をしていただきたい。TAC管理を採用する場合には、漁業経営への影響や水産業への利益という観点から検討・議論していただきたい。

- 複数種一括管理について、想定にある底びき網漁業だけでなく、浮魚類を対象とする大中型まき網漁業でも、同様の状況が考えられることから、検討することも考えてほしい。
- 愛知県では三重県の同業者と協力し、地域で資源管理の取組を行っている。伊勢三河湾では、来遊資源のみを利用し、操業時期等の規制を導入し、来遊資源の保護を行っている。この結果、マイワシやシラス漁の漁獲量は向上している。こうした取組は今後も継続していきたいと考えており、今までどおりの方法が適していると思う。TAC管理は適さないのではないか。漁業者の死活問題に係わるものであり、よく検討いただきたい。

(4) 水産機構より、資料7を用いて、カタクチイワシ太平洋系群の資源評価について説明。

【主な議論】

- 将来の予測漁獲量のグラフについて、青い線・赤い線が複数あるが、平均の漁獲量の線は記載がないのか。
- 現状の漁獲圧に基づく平均の漁獲量は何トンぐらいか。
- サバ類の捕食の影響について、資源量に関し近年はそこまで差はないものの、2020年当時は3倍程度異なっていたということ、さらに近年でも考え方の違いによって漁獲割合が30%も異なることを認識していただきたい。漁獲を仮にゼロにした場合でも、ほぼサバ類に捕食されているという結果となり、漁獲制限による効果がどこまであるのか。TAC管理で制限されると、現場の努力で資源が回復した効果の恩恵も受けられない。こうした現場の努力を認識していただきたい。
- 資源量指標値の取扱いについて、どのように活用しているのか。
- 漁場が沿岸寄りになってきているとはいえ、狙いが異なるので、資源量指標値が資源量を必ずしも示しているとは限らない。現時点で、全体の傾向と差異はないとのことであったが、こういった状況も考慮していただきたい。
- 関係する漁業者は、カタクチイワシはTACに馴染まないという意見。資源評価には不確実な部分が多すぎる。夏頃に、シラスやカエリが多くなっているが、サイズが大きくなったカタクチイワシは見当たらない。沖により広く薄く分布しているようで、資源状況がうまく把握できていないのではないかと。このため、厳しい資源管理には納得ができない。地先の沿岸に加工原料に適した来遊があった場合に漁獲している他、独自の取組等も行っており、TAC管理は不要だと思う。
- 調査船調査は、沿岸・沖合のどちらを中心に行っているのか。三重県、愛知県の2県で漁獲の半数近くあり、それぞれが操業日数を減らしている中、漁獲の強さがこれほど大きいのはなぜか。
- 調査船調査は、国で行っている調査のみか。北海道の調査船の結果を見ると、これまで見られなかったのに、カタクチイワシが主に獲れたという結果があったり、道東沖の初期の操業時に網にカタクチイワシが刺さった。こうした情報は考慮しているのか。
- 単一の魚種だけをみて資源評価しているのでは、これを基にしたTAC管理は時期尚早ではないか。もう少し資源評価が改善されてから資源管理をすべきではないか。
- 魚種交代の可能性のある時期に早急に管理をはめてしまうと、カタクチイワシは単

価も低いため、サバ類やマイワシが減った時に困る人が出てくる。全魚種が同時に増えると考える人はいないので、管理に当たっては、慎重に検討いただきたい。

- 漁業者の間では、北海道（おそらく道東沖のこと）で獲れ始めた魚が、今後、（おそらく東北太平洋沖で）獲れるようになるという、以前からの言い伝えがある。
- サバ類の捕食の影響がどれだけ大きいのか、説明していただきたい。同時に、サバ類と同時にMSYが達成されるのかも含め、議論していくべきではないか。次回のステークホルダー会合で、漁業者もわかるように説明いただきたい。

（５）水産庁よりとりまとめ

主に以下のような意見・議論があった。

（資源管理について）

- 資源管理の目標と漁獲シナリオをどのような考え方で定めていくのか、特にMSYとの関係について、説明してほしい。
- 不確実性を考慮する上で、目標をどう設定するのか。
- 狙って獲っていない現状を踏まえ、従来のTAC魚種以上に、TAC管理の柔軟な運用を検討してほしい。
- 自主的な取組の評価を基に、管理方法を検討してほしい。

（資源評価について）

- 資源評価の不確実性も含め、現場の納得感が得られるようしっかりと説明してほしい。
- サバ類の捕食の影響等、次回ステークホルダー会合で漁業者にもわかりやすい説明をしてほしい。
- 都道府県や業界団体には、操業実態に関する更なる情報提供をお願いしたい。

以上のような意見を踏まえて、次回のステークホルダー会合において、水産機構から、サバ類の捕食による影響を含め、資源評価結果についてわかりやすい説明を行うとともに、水産庁からは資源管理手法検討部会で整理された論点や意見について、対応の方向をより具体化し、議論・検討を深めることとする。

＜ウルメイワシ太平洋系群＞

（６）水産庁より、資料８を用いて、資源管理手法検討部会で整理された意見や論点と対応の方向について説明。

【主な議論】

- カタクチイワシとウルメイワシは同時に管理を開始するのか。
- 「混じり」について「最終的に製品として販売される」というのはどういう意味か。餌の場合など、実際には難しいと感じている。
- 分布の縁辺に位置する都道府県の場合に、TACの配分自体（「現行水準」による配分すら）を行わないという選択肢はあるのか。
- 「現行水準」による管理とされた場合に、ほとんど漁獲実績のない漁業種類等に漁

獲努力量管理の指導をする必要はあるのか。

- ウルメイワシを専獲している方はいるのか。

(7)水産機構より、資料9を用いて、ウルメイワシ太平洋系群の資源評価について説明。

【主な議論】

- 漁獲管理規則の係数はどのように計算するのか。TAC設定に直結するものであり、関係者と議論した上で決めるものではないか。毎年の産卵量の推定に基づく計算では、かなり変動が大きいのではないか。様々なオプションを提示していただき、関係者との議論を経て決めていくべきだと思う。
- 漁獲努力量の推定は、どのようになっているのか。ウルメイワシのまとまった漁場はあるのか。TAC管理をするほどの魚種なのか疑問。
- ウルメイワシはよくわからない魚種。資源量が少ないので沿岸にいるものかと考えるが、資源量が増えた場合には沖合に広く分布することになるのか。
- 資源量指標値が過去の平均が1となっているが、過去の分散を示しているのか。
- 調査船調査点について、ウルメイワシだけでこれだけ行っているのか。年によって水温等が異なり、産卵場が変わったりしており、そういった情報を踏まえた調査となっているのか。
- 狙って獲らずに 3.5～4万トン漁獲されてきたのに対し、情報が少ないから保守的になって今回のTACの提案が2万トンとされているのではないか。本当に、このような管理をしていくのか。TACの対象とするかも含めて議論すべき。

(8)水産庁よりとりまとめ

主に以下のような意見・議論があった。

(資源評価について)

- 2系の資源評価の考え方について、漁業者にもわかりやすく説明してほしい。

(資源管理について)

- TACを導入した場合の数字等も含めて議論していく。
- 操業実態等について把握するため、関係都道府県、団体等に協力をお願いしたい。

以上のような意見を踏まえて、次回のステークホルダー会合において、水産機構から、特に2系のABC算定ルールのかえ方を含め、資源評価結果についてわかりやすい説明を行うとともに、水産庁からは資源管理手法検討部会で整理された論点や意見について、対応の方向をより具体化し、議論・検討を深めることとする。

以上